BUDŌ NEWS

今月のニュース

90kg級加藤に天皇杯

平成24年全日本柔道選手権大会

ロンドン五輪柔道競技日本代表決まる

（後列左から）平岡、海老沼、中矢、中井、西山（将）、穴井、上川
（前列左から）福見、中村、松本、上野、田知本、緒方、杉本

平成24年全日本柔道選手権大会

柔道日本一を決める平成24年全日本柔道選手権大会は4月29日、日本武道館で開催された。

決勝では加藤博剛四段（関東・千葉県警）が石井竜太三段（東京・日本中央競馬会）を破って初優勝し、重量級以外の優勝としては、関根忍以来40年ぶりとなった。

3位には百瀬優四段（東京・旭化成）と鈴木桂治六段（推薦・国士舘大教）がそれぞれ入賞した。

なお、昨年準優勝の穴井隆将五段（天理大職）は欠場した。

大会は全国10地区の予選を勝ち上がった36名に、前年の優勝者を加えた計37名が出場し、体重無差別のトーナメント戦で覇を競った。

試合は国際柔道連盟試合審判規定で行われ、時間は6分間、時間内に勝敗を決しない場合は旗判定によって勝敗を決した。

加藤博剛が選手権制覇

決勝＝加藤（上）が石井に一本勝

３回戦＝加藤（左）対香川

３回戦＝棟田（奥）対髙井

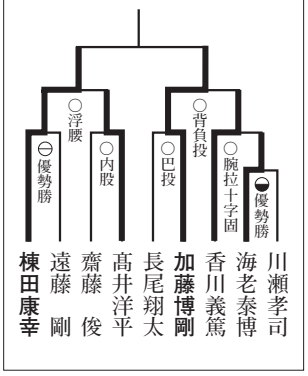
◆序盤戦（８強まで）

棟田が髙井を制す

今回で史上最多14回目の出場となった棟田康幸（東京・警視庁）は、３回戦で初戦を一本勝で突破した髙井洋平（九州・旭化成）と対戦。ベテラン同士の戦いとなり、場内は大いに盛り上がった。試合は棟田が髙井の払腰を浮腰に返して一本勝した。

加藤の立技が冴え、８強へ

寝技の評価が高い加藤博剛（関東・千葉県警）は初戦、長尾翔太（近畿・兵庫県警）から巴投で一本を奪うと、続く３回戦では、香川義篤（中国・岡山県警）を背負投で破って、２試合連続一本勝で準々決勝進出を決めた。

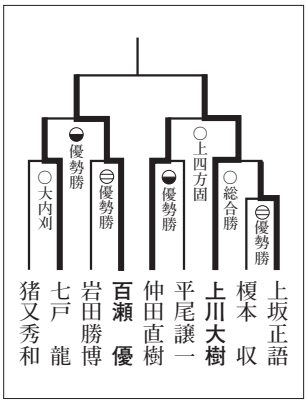


百瀬が判定で七戸を降す

百瀬優（東京・旭化成）は初戦、岩田勝博（近畿・兵庫県警）を降すと、３回戦で七戸龍（九州・九州電力）と対戦。互いに技を出し合うが決まらず、勝敗の行方は旗判定に持ち越され、３―０で百瀬が七戸に勝って、８強入りを決めた。

上川、危なげなく準々決勝へ

注目の上川大樹（東京・京葉ガス）は、３回戦で仲田直樹（東北・仙台大教）と対戦。上川は仲田が四つん這いになると、仲田の襟で首を括り、仲田は堪らず仰向けになる。そこをすかさず上四方固に抑え込んで一本勝した。



▲３回戦＝上川（上）対仲田

▶３回戦＝百瀬（右）対七戸

３回戦＝鈴木（上）対生田

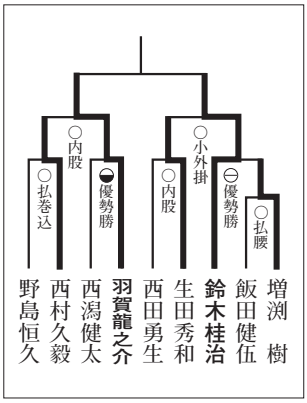
３回戦＝羽賀（手前）対西村

初出場の羽賀が力を見せる

初出場の羽賀龍之介（東京・東海大）は、初戦を判定で勝ち上がると、続いて西村久毅（北信越・敦賀高教）との対戦。羽賀は組み際の小外刈で有効を奪う。さらに場外際、羽賀の内股が決まって一本勝とした。

鈴木が生田に一本勝

昨年優勝の鈴木桂治（推薦・国士舘大教）が登場。初戦は増渕樹（九州・旭化成）を多彩な技で攻め立て、指導３で勝ち上がった。３回戦は初戦を37秒で一本勝した生田秀和（関東・ＡＬＳＯＫ）。序盤から生田が積極的で鈴木に指導がつく。開始２分、鈴木は生田の内股を組み止めて、技の終わり際に小外掛を合わせて一本勝した。

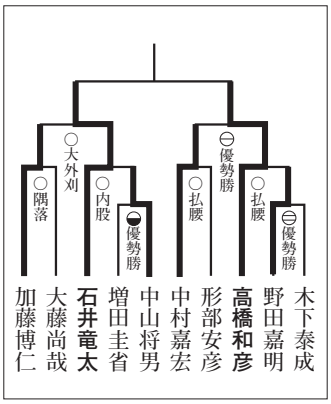


技が冴えた石井

石井竜太（東京・日本中央競馬会）は中山将男（近畿・大阪府警）との初戦、開始14秒に組み際の内股が見事に決まって一本勝した。３回戦は加藤博仁（関東・千葉県警）を中盤に大外刈で降して、ベスト８入りを決めた。

高橋が順当に８強進出

一昨年の選手権者である高橋和彦（東京・新日本製鐵）は初戦を払腰で一本勝すると、３回戦は中村嘉宏（北海道・北海道警）との対戦。序盤は中村の攻勢だったが、中盤以降は高橋が主導権を取り返し、中村に指導が累積。技は決まらなかったものの指導３で高橋が勝ち名乗りを受けた。



◀３回戦＝石井（手前）対加藤　▲３回戦＝高橋（右）対中村

◆4回戦

棟田の夢、ここで潰える

加藤博剛　◒判　定　棟田康幸

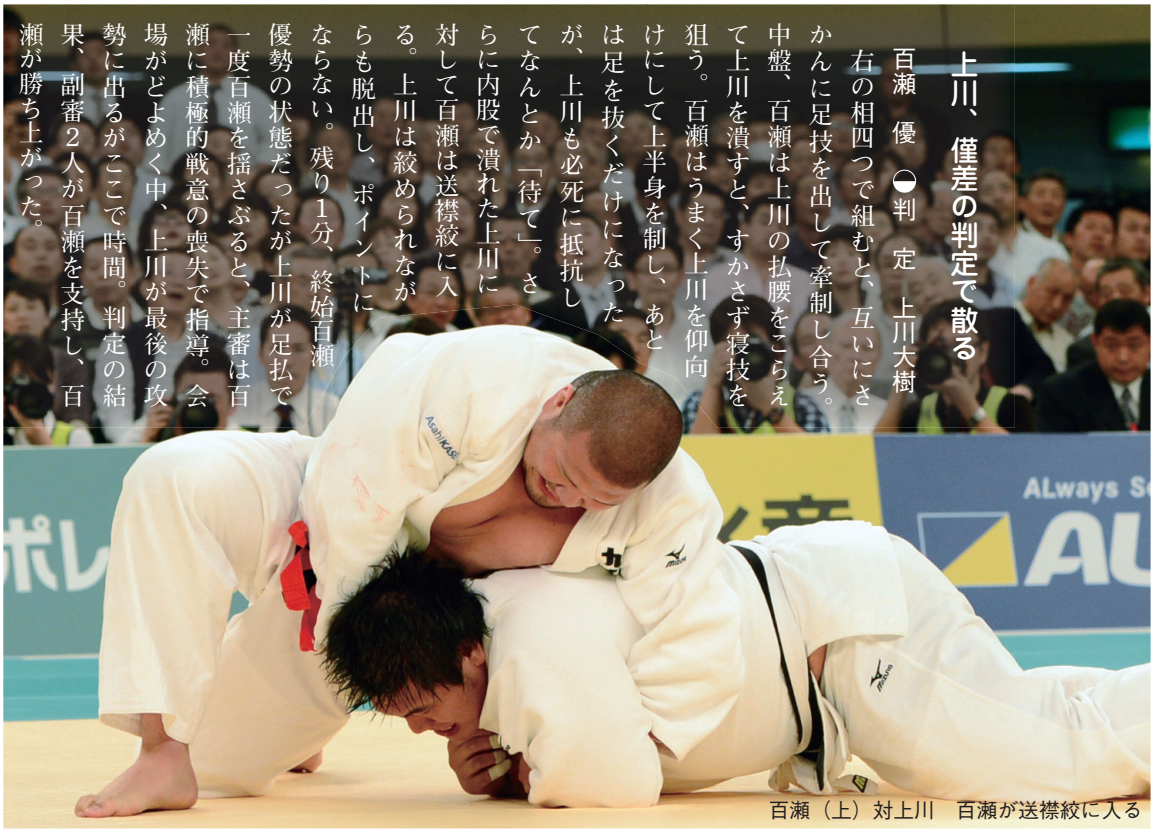
加藤は内股で棟田を跳ね上げると会場が盛り上がるが、棟田は腹這いで凌ぐ。潰れた棟田の腕をとって寝技を狙うがここで「待て」。なおも加藤は巴投や背負投で攻め、棟田に指導がつく。棟田の逆襲が始まり、今度は加藤に指導がつく。加藤は終盤に片襟から無理に背負投に入ると、棟田を担ぐがポイントにはならない。ここで時間となり、旗判定は加藤に3本揃って、加藤が準決勝進出を決めた。

加藤（下）対棟田　加藤が背負投で棟田を攻める

上川、僅差の判定で散る

百瀬　優　◒判　定　上川大樹

右の相四つで組むと、互いにさかんに足技を出して牽制し合う。中盤、百瀬は上川の払腰をこらえて上川を潰すと、すかさず寝技を狙う。百瀬はうまく上川を仰向けにして上半身を制し、あとは足を抜くだけになったが、上川も必死に抵抗してなんとか「待て」。さらに内股で潰れた上川に対して百瀬は送襟絞に入る。上川は絞められながらも脱出し、ポイントにならない。残り1分、終始百瀬優勢の状態だったが上川が足払で一度百瀬を揺さぶると、主審は百瀬に積極的戦意の喪失で指導。会場がどよめく中、上川が最後の攻勢に出るがここで時間。判定の結果、副審2人が百瀬を支持し、百瀬が勝ち上がった。



百瀬（上）対上川　百瀬が送襟絞に入る

羽賀の健闘に会場が沸く

鈴木桂治 ◒判 定 羽賀龍之介

序盤から常に羽賀が攻め立てる展開となった。しかし、鈴木も要所で足技を飛ばして、羽賀の好きにはさせない。鈴木が払巻込を仕掛けると羽賀がこれを小外刈に返して、鈴木が畳に落ちるが、これは場外。最後まで切れることなく攻め続けた羽賀だったが、技の数よりも質を評価されたか、判定は鈴木に2本上がった。試合終了後、会場からは畳を降りる羽賀を称える大きな拍手が起こった。

鈴木（奥）対羽賀　鈴木の大外刈を羽賀が堪える

大外一閃、石井に軍配

石井竜太 ○大外刈 高橋和彦

組手争いを制して技を仕掛けるのは石井。大外、内股と途切れない。高橋も内股を狙っていくが、石井の勢いは止まらない。石井は払腰、谷落、大外刈と連続技を仕掛けると高橋はたまらず背中から畳に落ちて万事休す。石井が4強進出を決めた。

石井（右）対高橋　石井が大外刈で一本勝

◆準決勝

加藤（下）対百瀬　加藤が巴投で技有を奪う

加藤が百瀬の巨体を投げる

加藤博剛　㊀優勢勝　百瀬　優

開始直後、加藤は自分の組手になると、小内刈から巴投を仕掛ける。この巴投が百瀬の巨体を持ち上げ、畳に落とすと主審の判定は技有。加藤は右組みの百瀬の引き手を封じ、百瀬にまともに技を出させない。終了間際には百瀬の内股を掬投気味に返して、有効を奪う。ここで時間となり、加藤が初めての決勝進出を決めた。

◉百瀬優四段（東京・旭化成）

「加藤先輩とは公式戦では初めてでしたが、高校の頃から練習はしてました。練習では今日のように思い切った技はありませんでした。寝技も強いですね。ああいう粘り強さは見習わないといけないと思います。母校の国士舘はそれが売りなので。

気持ちの面でも、後輩ということは一切捨てて全力で戦いました。敗因は組み止められなかったことですね。相手は小さいのでしっかり持って自分の間合いに入れば良かったんですけど」

◆◇選手コメント①◇◆

◉仲田直樹五段（東北・仙台大教）

「震災では本学から3名の犠牲者が出ました。蛇口を捻れば水が出る。道場に行けば練習ができる。当たり前のことが当たり前にできることの喜びをあらためて感じました。教職に携わる者として学生に伝えていきたいと思います」

◉野島恒久四段（東北・福島県警）

「福島は復興の大きな壁にぶつかっています。私も全日本選手権という高い壁に向かっていきました。自分が頑張れば壁を乗り越えられると思って、被災された方とともに高い壁を乗り越えられたらと思ってます」

◉榎本収三段（四国・新田高校教）

今大会初出場で、最軽量の73㎏級の選手である。

「出場できることは光栄で、初めて観た大学1年の時にこの舞台に立ちたいと思っていました。しかし、初戦敗退は悔しいです。生徒にはこの舞台に立って上位に勝ち上がっていく選手を目指してほしいです」

◉形部安彦三段（四国・香川県警）

榎本と同じく、今大会最軽量で初

石井（上）対鈴木　この時、鈴木の肩に大きな負担がかかり脱臼してしまった

鈴木が重傷を負って総合負

石井竜太　○総合勝　鈴木桂治

開始14秒、石井の仕掛けた内股に鈴木は手をついて逃れようとするが、肩から落ちて技有を献上。ここで鈴木がなかなか立ち上がれない。主審が開始線に戻ることを促しても戻れない鈴木だったが、なんとか試合再開となると、石井と組んだ瞬間に右肩を押さえて膝から畳に崩れる。鈴木は右腕がまったく使えない様子で、主審は積極的戦意の喪失、極端な防御姿勢の指導を重ねる。最後は3つ目の指導が鈴木について、技有と合わせて、石井の総合勝となった。

◉鈴木桂治六段（推薦・国士舘大教）

試合後は病院に直行した。診断によると右肩鎖関節脱臼。通常、この怪我は全治2、3カ月であり、選抜体重別への出場が危ぶまれる。

以下、広報を通じて発表された鈴木のコメント。

「こんな形で全日本柔道選手権大会が終わってしまい、申し訳ない気持ちです」

出場である。

「初出場で緊張しました。代表に恥じない戦いをしたかったのですが、不甲斐ない試合をしてしまいました。戻ってこられるよう頑張ります」

◉飯田健伍三段（中国・山梨学院大）

今大会最年少出場（18歳）で、出場決定時は高校在学中だった。

「悔しいです。得意の大内刈をやろうと思いましたが、組手が不十分で、相手に透かされてそのまま払腰で投げられてしまいました。良いところなしだったので一番悔しいです。次こそ自分の柔道がしたいです」

◉髙井洋平四段（九州・旭化成）

「最後に棟田先輩と試合できてよかったです。今はあまり柔道に気持ちが集中していません。もう歳も歳ですからね。会社で経理の仕事をしてみたいと思っています。人に教えるのはあまり得意ではないので、指導者の道へは進みません。最近は稽古でも若手に勝てなくなってきましたし、今はまったく悔いはありません。井上康生先輩に勝ったのが一番の思い出ですね」

晴れやかな表情で語った髙井だった。彼が畳を降りる日は近い。

◆決勝

加藤（左）対石井　加藤が小内刈で石井を攻める

柔能制剛　小兵の加藤が優勝

加藤博剛　○隅　落　石井竜太

加藤は174cm 93kgで、石井は193cm 135kg。身長約20cm、体重約40kgの体格差のある対戦となった。両者ともに勝てば初優勝の大一番。

序盤、加藤は石井の組手を警戒して間合を取る。石井はなんとか加藤をつかまえると、大内刈から大外刈への連絡技で加藤を揺さぶる。対する加藤は危険を察知すると、片袖からの背負投で石井を担ぐが、石井は腹這いで逃れる。さらに加藤は好機と見るや、小内刈、巴投、一本背負投、払巻込と連続技で休む間もなく攻め立てるが、最後は加藤自身が潰れて「待て」。

仕切り直して加藤が石井の背中に手を回すと、これを嫌った石井が中途半端に小外刈に入る。加藤は冷静に刈り足を透かし、バランスを崩した石井に体重を預けると、石井は堪らず背中から畳に落ちた。主審が高々と手を挙げて一本の宣告。この瞬間、加藤が出場5回目にして、初優勝を掴むとともに、重量級以外として、40年ぶりの優勝を決めた。

◉石井竜太三段（東京・日本中央競馬会）

前回出場したのは初出場だった4年前。その時は初戦敗退だった。今回は大きく上回る準優勝の成績だったが本人に笑顔はない。

「全く納得していません。優勝しか目指していなかったので、とても悔しいです。今年一番の大会だと思って、挑戦者の気持ちでずっと練習していました」

決勝の相手は90kg級の加藤。やりにくさはなかったのだろうか。

「決勝まで上がってくる選手なので、今日の対戦相手の中で最も強かったと感じました。練習では何度も手を合わせているのですが、ああやって返されてしまい、自分はまだまだだと心の底から感じました」

準決勝で対戦した鈴木桂治には自らの技で肩を負傷させてしまった。

「負傷させた後、思い切りやれなかったのが残念です。何よりも怪我をさせてしまったのが、今でもひっかかっています」

次は選抜体重別が控えている。

「もう一度気持ちを切り替え、優勝して名前を上げたいと思います」

次代のエースが力強く誓った。

兄弟二人三脚で掴んだ栄冠

◉加藤博剛四段（関東・千葉県警）

「夢なのか、自分がどこにいるのかわからないような気分です。兄とずっと二人三脚でやってきて、今日はそのいいところが出ました」

今大会には長兄の博仁も出場、初戦を一本勝し、兄弟で大会を盛り上げた。

「兄貴が一緒に出場していたので、気分はリラックスしていました。試合が終わった後、兄から『ついにやったな』と言われたので、『兄ちゃんのおかげだよ』と答えました。応援してくれた家族に感謝です」

加藤といえば、寝技で有名な選手だが、意外なことに加藤の今大会の決まり技に寝技は一つもない。

「自分には立技を返されても寝技があるので、思い切りやろうと思っていました。この大会に出てくる選手は皆強いので全試合が山場でした。勝つために必死でした」

決勝は超級の石井から見事に一本を奪った。

「石井選手と対戦するのは2回目でした。最初に危ない場面がありましたが、なんとか立て直しました。最後は体が勝手に動きました」

加藤は沖縄県石垣島生まれの26歳で、父親の仕事の関係で6歳から東京に移住した。10歳から柔道をはじめ、中学から大学まで一貫して国士舘に在籍。現在は千葉県警察警務部教養課に所属している。一昨年、階級を81kg級から90kg級に上げ、昨年の全日本柔道選抜体重別選手権大会では2位に入賞している。この大会を重量級（一番重い階級とその次の階級）以外の選手が優勝するのは昭和47年の関根忍氏以来40年ぶりである。

「体重のことはあまり意識せず、勝つことだけを考えていました。次は選抜体重別がありますが、意識を集中したいと思います。ゆくゆくは世界を目指していきたいです」

加藤の目はすでに次の舞台を見据えていた。

◆加藤博剛四段、優勝への軌跡

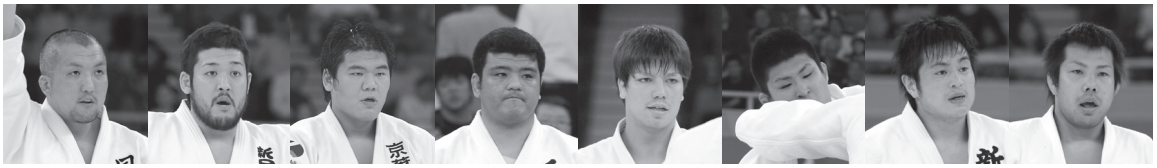
4回戦　棟田康幸戦

2回戦　長尾翔太戦

準決勝　百瀬優戦

3回戦　香川義篤戦

2回戦	○巴投	長尾翔太
3回戦	○背負投	香川義篤
4回戦	◒判定	棟田康幸
準決勝	㊀優勢勝	百瀬優
決勝	○隅落	石井竜太



鈴木桂治六段　高橋和彦五段　上川大樹四段　加藤博仁五段　七戸龍三段　飯田健伍三段　榎本収三段　仲田直樹五段

石井竜太三段　百瀬優四段　羽賀龍之介三段　棟田康幸五段　生田秀和六段　髙井洋平四段　形部安彦三段　野島恒久四段

◆◇選手コメント②◇◆

◉七戸龍三段（九州・九州電力）

昨年は鈴木桂治に判定で敗れてベスト8。今年は百瀬に判定で敗れた。

「百瀬選手とは練習をいつも一緒にやっているので、頭の中でシミュレーションはありました。持ったらいけると思ったんですけど……」

◉生田秀和六段（関東・ALSOK）

「一本を取りにいく柔道をしたいと思っていました。一本勝か一本負か、という結果には満足しています。最後の大会のつもりで出場しました」

選手権出場は3年ぶり。一昨年、昨年は会場で大会を観戦していた。

「なんとしても出てやるという気持ちを強く持ちました。怪我でリハビリと筋トレしかできませんでしたが、準備期間が短かったわりには、よくやったと思います」

やはり選手権は格別だという。

「日本武道館で試合をするというのは本当に気持ちがいいです。すごく充実した大会でした」

◉加藤博仁五段（関東・千葉県警）

大会最年長の34歳で出場した。また、優勝した博剛の長兄にあたる。開会式では選手宣誓も行った。

「兄弟で出場できるので、楽しくやれればと思ってやりました。選手宣誓は名誉なことなので気持ち良くさせていただきました」

◉棟田康幸五段（東京・警視庁）

史上最多の出場14回を記録した。

「出場回数だけじゃ意味がありません。自分がボロボロになっても納得がいくまで続けようと思います。いつか選手権にあいつがいなくなって寂しいと言われたら嬉しいです」

ベテラン同士の絆について語る。

「最後は桂治とやりたいですね。今日の髙井戦もそうでしたが、昔からやっている仲間と試合するのは楽しいです。手の内を知り尽くしている分、本当にワクワクしますね」

◉上川大樹四段（東京・京葉ガス）

「不甲斐ないっすね。自分が弱かっただけです」

俯（うつむ）きながらぼそぼそ答える上川。まったく覇気がない。

「選抜体重別に向けて頑張ります」

◉羽賀龍之介三段（東京・東海大）

初出場でベスト8。積極果敢な試合が観客の心を掴んだ。

「鈴木選手には上手く自分の長所を抑えられました。最初、勢いよくいったんですけど、後半は自分の方が若いのに息が上がって、しんどいところを攻められました」

父・善夫さんはこの大会ベスト8の経験がある。

「父には『越えてくれ』と言われましたが、見事にできなかったですね」

◉高橋和彦五段（東京・新日本製鐵）

「すべての面で劣っていました。100回対戦しても勝てないくらいの実力差があると思います」

次戦は選抜体重別である。

「やり残したことがないように柔道人生の集大成として、気負わずにいこうと思います。今日は完敗です」

◉篠原信一全日本男子監督

「優勝した加藤が素晴らしかったです。準優勝の石井も非常にいい。怪我などで思うようにできなかった選手もいたでしょうけど、重量級は何をやっているのかと思いますね。自分も目指してきましたから、全日本には強い思いがあります。全日本に勝ったら外国人には負けられないという思い。何が何でも負けないという姿勢、気持ちを持たなくてはいけない。そういう大会です」

◆形演武

講道館護身術＝取・濵名智男七段
受・山﨑正義七段

五の形＝取・松井　勲八段
受・佐藤伸一郎七段

投の形＝取・井上康生六段、受・井上智和五段

投の形を演じた二人は兄弟で、智和が兄、康生が弟である。

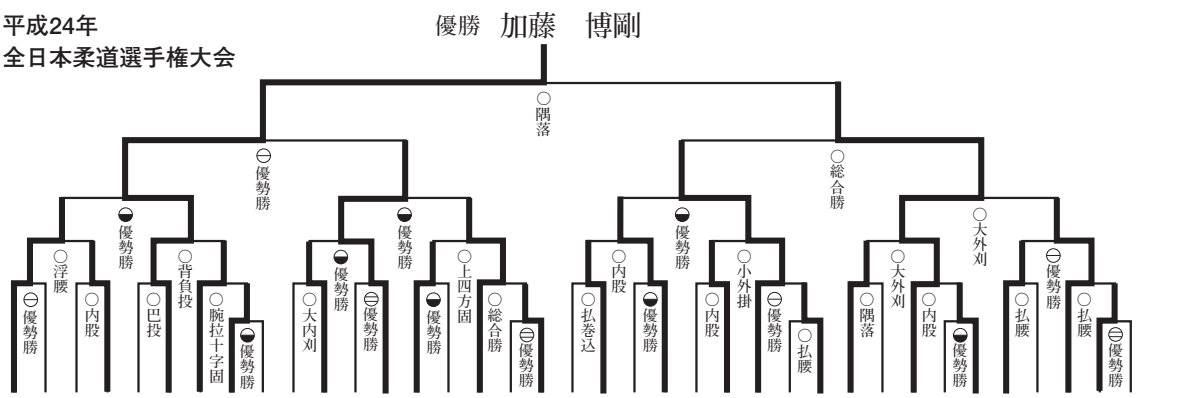
◉井上康生六段

「緊張しました。畳に上がる時は試合に似たものがありました。いろんな記憶が蘇りましたね。また、今回のことで形の重要性を感じることができました。今後、形の普及にも力を入れていきたいと思います」

◉井上智和五段

「始まった瞬間に頭が真っ白になりました。兄弟でやれたのが、一つ親孝行になったのかなと思います」

平成24年
全日本柔道選手権大会



	段位	地区	所属	出場回数
木下泰成	三段	（近畿・兵庫県警察）		初
野田嘉明	四段	（九州・旭化成）		初
高橋和彦	五段	（東京・新日本製鐵）		4
形部安彦	三段	（四国・香川県警察）		初
中村嘉宏	四段	（北海道・北海道警察）		初
中山将男	四段	（近畿・大阪府警察）		初
増田圭省	三段	（東海・静岡県警察）		2
石井竜太	三段	（東京・日本中央競馬会）		2
大藤尚哉	四段	（東京・警視庁）		6
加藤博仁	五段	（関東・千葉県警察）		3
増渕　樹	四段	（九州・旭化成）		4
飯田健伍	三段	（中国・山梨学院大学職）		初
鈴木桂治	六段	（推薦・国士舘大学教）		11
生田秀和	六段	（関東・ＡＬＳＯＫ）		12
西田勇生	三段	（近畿・天理大学）		初
羽賀龍之介	三段	（東京・東海大学）		初
西潟健太	四段	（九州・旭化成）		3
西村久毅	四段	（北信越・敦賀高校教）		初
野島恒久	四段	（東北・福島県警察）		初
上坂正語	五段	（近畿・大阪府警察）		初
榎本　収	三段	（四国・新田高校教）		初
上川大樹	四段	（東京・京葉ガス）		3
平尾譲一	三段	（東京・パーク24）		初
仲田直樹	五段	（東北・仙台大学教）		3
百瀬　優	四段	（東京・旭化成）		2
岩田勝博	五段	（近畿・兵庫県警察）		4
七戸　龍	三段	（九州・九州電力）		2
猪又秀和	五段	（北信越・東京学館新潟高校教）		6
川瀬孝司	三段	（東海・岐建）		初
海老泰博	三段	（東京・旭化成）		初
香川義篤	四段	（中国・岡山県警察）		4
加藤博剛	四段	（関東・千葉県警察）		5
長尾翔太	三段	（近畿・兵庫県警察）		初
髙井洋平	四段	（九州・旭化成）		8
齋藤　俊	三段	（近畿・新日本製鐵）		3
遠藤　剛	四段	（北海道・北海道警察）		2
棟田康幸	五段	（東京・警視庁）		14

待望の単行本化

嘉納治五郎と講道館の高弟をはじめとする日本人の手による柔道の国際的普及の歴史

柔道の國際化
――その歴史と課題

財団法人講道館 図書資料部長
村田直樹 著

題字　講道館名誉館長・嘉納行光

講道館柔道を創始し、自ら柔道を世界に広めるため尽力した嘉納治五郎。嘉納の意思を受けて海外雄飛した、講道館を代表する高弟たち。彼らは如何に、どのような思いで、普及に取り組んだのか。

数々の資料を繙き、柔道が世界的な競技となるまでの、先達の足跡をたどる。そして、そこから見えてきた運動文化の国際的普及における課題とは。

（四六判・上製・552頁）

第1章　普及への意思
柔道史の原点
欧州教育事情視察

第2章　海外への進出
米国大統領の入門
新大陸へ派遣第2号
異種格闘技に生きた前田光世
英国柔道の基礎ー武道会
武道会を訪れた嘉納と高弟会田
小泉が語る英国柔道史
仏蘭西への道
メトード・カワイシとは何か
駐仏日本国大使　杉村陽太郎
続々と仏蘭西へ
海外より見た柔道ー独逸通信
東洋への進出
異文化理解の容易なさ

第3章　国際柔道連盟の結成
国際柔道連盟設立の前夜
嘉納逝き連盟成らず
欧州から国際柔道連盟の結成
講道館長、国際柔連会長に就任
世界柔道選手権大会開催
東京五輪招致成功
東京五輪と正式種目柔道
パリの仇
体重別に勝ち、無差別に散る

第4章　道とスポーツ
日本の後退　欧州の前進
変わり行く柔道
不易流行

編集・発行　日本武道館
〒102-8321　東京都千代田区北の丸公園2-3
ホームページhttp://www.nipponbudokan.or.jp

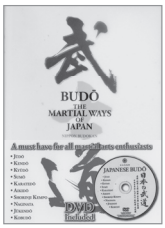
お問い合わせ・ご注文は
日本武道館出版広報課
までどうぞ！
TEL03(3216)5147
FAX03(3216)5158

日本武道館発行の単行本（本をクリックすると、詳細が表示されます）

日本の武道

日本武道館 編

（B5判・上製・箱入・526頁）



BUDŌ: THE MARTIAL WAYS OF JAPAN

日本武道館 編

翻訳・編集：アレキサンダー・ベネット

（B5判・上製・DVD付・336頁）

役に立つ少年柔道指導法

講道館道場指導部課長

向井 幹博 著

（A5判・並製・DVD付・414頁）

女子柔道の歴史と課題

筑波大学大学院准教授

山口 香 著

（四六判・上製・412頁）

マンガ・武道のすすめ

漫画家・別府大学教授

田代しんたろう 著

（B5判・並製・236頁）

武道における身体と心

神戸学院大学教授

前林 清和 著

（四六判・上製・370頁）

柔道はすばらしい

柔道塾紀柔館館長

腹巻 宏一 著

（四六判・上製・310頁）

今、なぜ武道か

―文化と伝統を問う―

福島大学教授

中村 民雄 著

（四六判・上製・370頁）

大先輩に聞く

月刊「武道」記者

田谷 将俊 著

（四六判・上製・376頁）

武道 過去・現在・未来

国際武道大学教授

田中　守 著

（四六判・上製・274頁）

武道 子どもの心をはぐくむ

早稲田大学教授・教育カウンセラー

菅野　純 著

（四六判・上製・410頁）

嘉納治五郎師範に学ぶ

講道館図書資料部長

村田 直樹 著

（四六判・上製・292頁）

輪代表に決定

7月に行われるロンドン五輪柔道競技の日本代表選手を決める平成24年全日本選抜柔道体重別選手権大会が5月12、13日、福岡国際センターで行われた。この大会には2日間で柔道ファン約7500名が観戦に訪れたほか、報道陣も約60社200名が取材し、注目度の高さが窺われる。

注目の女子48kg級は浅見八瑠奈（コマツ）がまさかの初戦敗退。決勝で福見友子（了徳寺学園職）が浅見に勝った岡本理帆（藤枝順心高）を破って優勝。女子52kg級では、決勝で中村美里（三井住友海上）と西田優香（了徳寺学園職）の直接対決が行われ、延長の末、中村が西田を抑え込んで優勝を決めた。

また、男子100kg級の穴井隆将（天理大学職）はオール一本勝で優勝した。男子66kg級の海老沼匡（パーク24）は決勝で森下純平（筑波大）を降して優勝した。

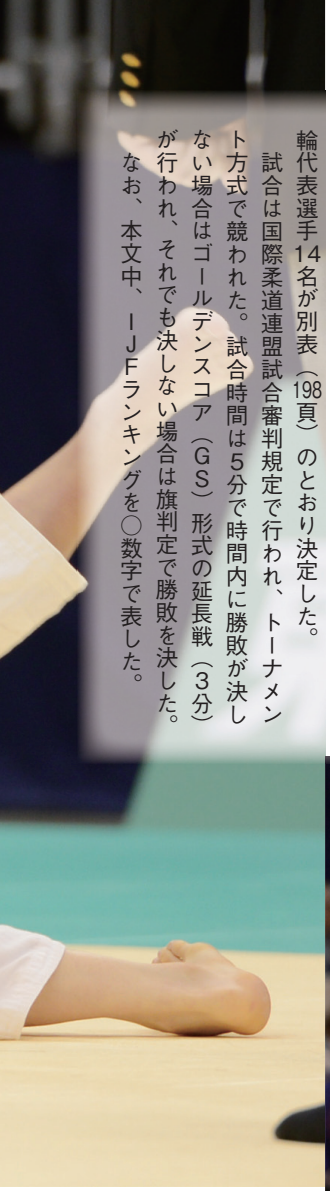
その他男子は、100kg超級は七戸龍（九州電力）、90kg級は加藤博剛（千葉県警）、81kg級は中井貴裕（流通経済大）、73kg級は中矢力（ＡＬＳＯＫ）、60kg級は平岡拓晃（了徳寺学園職）が、女子は78kg超級は杉本美香（コマツ）、78kg級は緒方亜香里（筑波大）、70kg級は田知本遥（東海大）、63kg級は上野順恵（三井住友海上）、57kg級は宇高菜絵（コマツ）がそれぞれ優勝した。

本大会は男女各7階級に8名ずつ計56名が出場して行われ、体重別の日本一を決めるとともに、ロンドン五輪日本代表最終選考会として開催された。

五輪出場のためにはＩＪＦランキング上位に入っていなければならないなどの条件（別掲）があるが、大会後の強化委員会で今大会の成績と過去の実績を元に、ロンドン五輪代表選手14名が別表（198頁）のとおり決定した。

試合は国際柔道連盟試合審判規定で行われ、トーナメント方式で競われた。試合時間は5分で時間内に勝敗が決しない場合はゴールデンスコア（ＧＳ）形式の延長戦（3分）が行われ、それでも決しない場合は旗判定で勝敗を決した。

なお、本文中、ＩＪＦランキングを○数字で表した。



女子 48kg級決勝＝福見（左）対岡本

女子 52kg級決勝＝中村（上）対西田

平成 24 年全日本選抜柔道体重別選手権大会

中村、福見が五

◆52kg級

決勝＝中村（左）対西田

中村が直接対決を制す

【代表候補選手】
①西田優香（了徳寺学園職）
③中村美里（三井住友海上）
⑪橋本優貴（コマツ）
（○数字はＩＪＦランキング）

西田と中村、どちらが五輪に出場しても金獲得が確実視されているこの階級の代表決定は、直接対決の決勝戦までもつれ込んだ。

決勝、西田が得意の背負投で攻めれば、中村も大外、小外と足を絡めて、寝技でもしつこく攻める。

中盤、西田の巴投が中村の体を跳ね上げるが、中村はこれを凌ぐ。西田はもう一度巴投に入ると、中村がうまくこれをかわし、横四方固に入ろうとするも、西田は場外に逃れて「待て」。中村の小内には西田も払巻込に返す。両者ポイントのないまま延長戦へ突入した。

開始1分、中村は西田の背負投を防ぐと、足で西田の首を制して腹這いの西田を返す。中村の足に自分の足を絡めて凌ごうとする西田。しかし、中村に足を抜かれて万事休す。中村が2度目の五輪出場を掴むとともに、西田の夢は破れた。

◉優勝＝中村美里選手（三井住友海上）

「一戦一戦集中した結果なので、勝ててよかったです」

西田には1月のマスターズで一本負。期するものがあったはずだ。

「いつも先に攻められて負けていました。今日は自分のペースに引き込めたと思います。平常心を保つことができました」

昨年の世界選手権で負けて以来、辛いことが続いたが乗り越えられたのは周りの人のおかげと感謝の気持ちを口にする。

「たくさんの方に支えていただき、今日も両親が応援に駆けつけてくれました。声は聞こえませんでしたが、気持ちが後押ししてくれました」

◉準優勝＝西田優香選手（了徳寺学園職）

試合から戻ってきた西田の顔は晴れやかな表情をしていた。

「4年前よりはいいです。気持ちはすっきりしていますが、応援してくださった方に申し訳ないです」

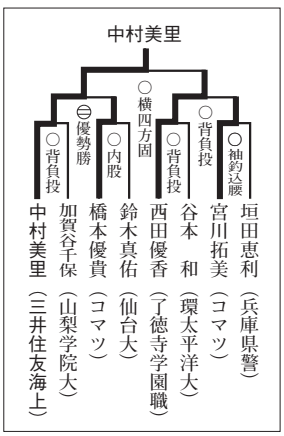
4年前、五輪代表の大本命として臨んだこの大会で初戦敗退。手を伸ばせば届くはずの代表権を逃した。

話が父・孝宏氏に及ぶと目に涙を浮かべた。

「『五輪に連れていってあげられなくてごめんね』と言いました。父は『しょうがない』と言っていました」

最後は代表を争う中村に敗れた。

「中村選手が相手だったからここまで頑張ってこられました。尊敬できるライバルです。少し休んでまたやりたくなったら気持ちを切り替えてやります」



◆48kg級

福見、悲願の五輪出場へ

【代表候補選手】
①福見友子（了徳寺学園職）
②浅見八瑠奈（コマツ）

1回戦＝岡本（左）対浅見

浅見は1回戦で高校生の岡本理帆（藤枝順心高）と対戦。岡本は積極的な試合運びで、浅見もなかなか崩せない。延長に入って、浅見が岡本を抑え込むが6秒で岡本に逃げられる。岡本の攻勢は最後まで止まらずに時間となった。判定の結果、2―1で岡本が勝利し、浅見はまさかの初戦敗退となった。

福見は初戦、山崎珠美（山梨学院大）からいきなり小外刈で技有を奪うと、中盤に袈裟固で抑え込んで合技一本勝した。準決勝は昨年敗れた山岸絵美（三井住友海上）を横四方固で降して決勝へ。

決勝は1回戦で浅見を破った岡本との対戦。福見は序盤から足技を出していくが、岡本はこれを凌ぐ。逆に岡本も福見の奥襟を取って攻めるが、福見も冷静に捌いていく。

延長に入っても両者ポイントを獲得することはできず、勝敗の行方は判定に委ねられ、3―0で福見が2年ぶり4度目の優勝を果たした。

◉優勝＝福見友子選手（了徳寺学園職）

「自分自身に負けたくないので気持ちを強く持って臨みました。決勝は一本勝してすっきりしたかったのですが……。この大会で勝つだけではなく、勝って五輪に行って、金メダルを取ることが目標です」

10年前、この大会で国内に敵無しと思われた田村（現・谷）亮子を破り、一躍注目を浴びたが、そのことが重圧になり自分の柔道を見失ってしまった。5年前には再び谷を破ったが、実績重視の選考によって、世界選手権代表の座を逃す。

決勝＝判定で白が3本揃い、福見が優勝を決めた

「ここまで来るまでにいろいろありましたがそれが自分の人生です。五輪を獲って終わりたいと思います」

◉浅見八瑠奈選手（コマツ）

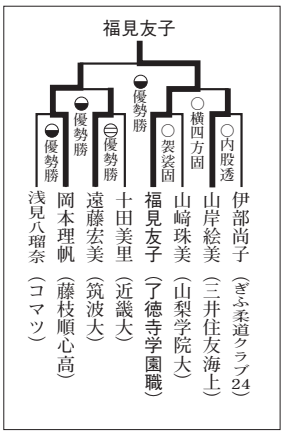
「たくさんの応援してくださった方に申し訳ないです。緊張で二週間くらい寝つけませんでしたが、緊張するのが当たり前ですし、その中で勝たなくてはいけませんでした。何のためにやってきたかといえば五輪のためです」

言う通り、浅見は五輪に出るためにがむしゃらに戦い、一昨年、昨年と世界選手権を連覇。いずれも決勝の相手は福見だった。

「五輪に出られなければ世界選手権連覇も私には意味がありません。五輪に出たいという気持ちが先行して今日は集中力が欠けていました」

◉準優勝＝岡本理帆選手（藤枝順心高）

「今日はとにかく一試合勝つことが目標でした。決勝もリラックスして臨むことができました。福見選手は動きも速く、力も強く、寝技もうまかったです」



女子 78kg 級決勝＝緒方（左）が池田から技有を奪う

カラーグラフ　全日本選抜柔道体重別選手権大会

男子 100kg 超級決勝＝七戸（右）が大外刈で上川を破る

女子 78kg 超級決勝＝杉本（下）対山部

男子 81kg 級決勝＝中井（奥）対川上

男子 100kg 級決勝＝穴井（左）の内股が浅沼をとらえる

男子 73kg 級決勝＝中矢（上）が崩上四方固で一本勝

◆100kg超級

伏兵、七戸がこの階級を制す

【代表候補選手】
⑫上川大樹（京葉ガス）
⑬高橋和彦（新日本製鐵）
⑲鈴木桂治（国士館大教）

全日本選手権で右肩に重傷を負った鈴木は初戦で王子谷剛志（東海大）と対戦し、2―1の判定で姿を消した。高橋も初戦で七戸龍（九州電力）を相手に指導を重ねて敗退。

上川は立山広喜、石井竜太（ともに日本中央競馬会）を破って決勝へ。

決勝は七戸対上川。中盤、七戸が大内刈で有効を奪うと、直後の大外刈で一本を奪って初優勝を決めた。

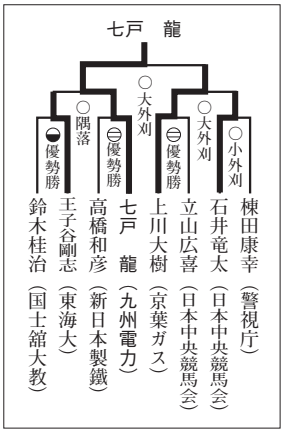
決勝＝七戸（右）が大内刈で有効を奪う

◉優勝＝七戸龍選手（九州電力）
「地元開催の大会なので、たくさん応援していただき、後押しされました。これから勝ち続けていきたいと思います。今日は初めての大会で優勝できて、本当によかったです」

◉準優勝＝上川大樹選手（京葉ガス）
「決勝は自分の柔道ができませんでした。優勝だけ考えていました。もっと前に出ようと思います」

◉高橋和彦選手（新日本製鐵）
「五輪に行く実力がないので負けました。指導してくださった先生方に感謝しています」

◉鈴木桂治選手（国士館大教）
「勝ちたかったですね。欠場は考えていませんでした。出場する気持ちを貫いてよかったと思います」



◆100kg級

穴井がオール一本で優勝

【代表候補選手】
③穴井隆将（天理大職）
㉗羽賀龍之介（東海大）

羽賀は1回戦、浅沼拓海（国士舘大）に残り1秒からの払腰で一本負。

穴井は初戦を総合勝、準決勝を払腰で一本勝すると、決勝では羽賀を破った浅沼と対戦。中盤、穴井が内股に入ると、浅沼は綺麗に一回転して畳に落ち、一本。穴井はオール一本勝で4年連続5回目の優勝を決めた。

◉優勝＝穴井隆将選手（天理大職）
「五輪で金メダルを取ることを目的として、普段の生活を送っているので、今回は通過点を通過したという実感です」

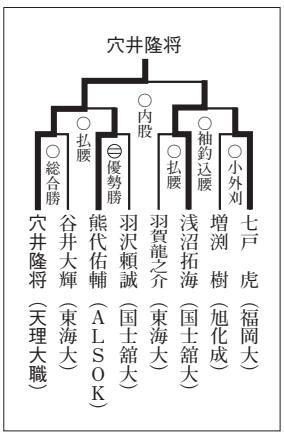
五輪代表を決める大会での優勝にも浮かれた言葉はまったくない。

この大会に専念するため、4月の全日本選手権の推薦を辞退した。大会前日の会見では、今回は内容にこだわると言っており、オール一本勝して有言実行を果たした。

「肩に力が入った場面もあり、自分としては100点ではありません。怪我などの不安はありませんので、今後は1分1秒を粗末にせず、柔道に集中していきたいと思います」

◉羽賀龍之介選手（東海大）
「この結果が今の実力です。左肩を痛めましたが、それを言い訳にはしたくありません。可能性は低いと思っていましたが、五輪という目標はモチベーションになっていました」

優勝＝穴井隆将選手



◆90kg級

加藤が代表候補を撃破

【代表候補選手】
②西山大希（筑波大）
③西山将士（新日本製鐵）
④小野卓志（了徳寺学園職）

決勝＝加藤（左）対西山（将）

今年の全日本覇者、加藤博剛（千葉県警）が1回戦で小野と対戦。加藤は再三にわたる小野の内股を組み止め、終盤には隅返で技有を奪うと、残り8秒に小外刈で一本勝した。

準決勝は西山（大）と当たった。延長開始1分、加藤の小内巻込に西山（大）は堪えきれず、背中からばったり。加藤が決勝へ。

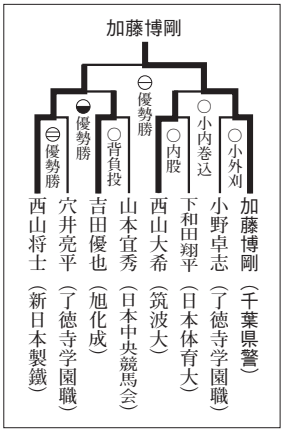
決勝は加藤対西山（将）。二人は高校、大学の同期である。中盤、加藤は場外際で西山の奥襟を引いて、隅返に入ると、主審は一本を宣告。副審二人が技有を示したが、これが決勝点となり、加藤が初優勝した。

◉優勝＝加藤博剛選手（千葉県警）
「この大会はずっと優勝を逃していたのですごく嬉しいです。自分は調子の波が激しいのでそこを直していきたいと思います」

◉西山大希選手（筑波大）
「自分から前に出るという気持ちで臨みましたが、まだまだ力不足でした。それまでは防げていた技で投げられて悔しいです」

涙を堪えながらの取材となった。

◉小野卓志選手（了徳寺学園職）
「北京が終わった後、限界が来ているのを感じていました。今の自分ではあの内股が限界です。自分自身で整理して今後のことを決めます」



◆81kg級

中井が激戦区を制する

【代表候補選手】
⑤中井貴裕（流通経済大）
⑬長島啓太（日本中央競馬会）
㉔川上智弘（國學院大職）
㉝高松正裕（桐蔭学園高教）

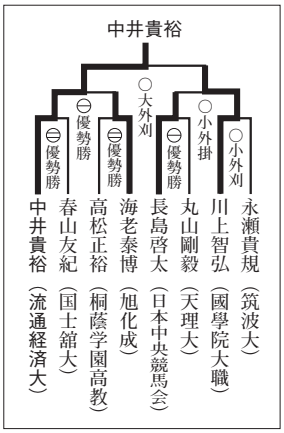
高松は初戦で海老の豪快な背負投に体が宙を舞う。なんとか横から落ちて一本は免れるが、時間内に逆転できず初戦敗退。

GSパリで3位入賞の長島と昨年のGS東京覇者の川上が準決勝で対戦。中盤、川上の小外掛が長島を捕らえて一本勝。川上はマスターズ準優勝の中井との決勝に臨んだ。

決勝、序盤は川上のペース。中井に指導がつくと、川上は隅返で有効を奪って突き放す。なんとか追い付きたい中井は渾身の大外刈。これが見事に決まって、中井が優勝した。

◉中井貴裕選手（流通経済大）
「本当に嬉しいです。一本が決まるとは思っていませんでした。五輪の選考に絡めるのは最後かもしれないので、気持ちを入れて戦いました。五輪ではやるだけやって、後悔のないようにしたいと思います。目の前の一戦一戦を全力で戦っていきます」

決勝＝中井（左）対川上



◆73kg級

中矢が五輪切符を手中に

【代表候補選手】
②中矢力（ALSOK）
④秋本啓之（了徳寺学園職）
⑱粟野靖浩（了徳寺学園職）

中矢は初戦で粟野と対戦。中矢が粟野の背負投を返し（技有）、崩袈裟固で抑え込んで合技で降した。

秋本は初戦で大東匡彦（旭化成）と対戦。ポイントのない中、残り30秒に大東の引込返を堪えきれず技有を献上。まさかの初戦敗退となった。

準決勝は延長で中矢が齋藤涼（旭化成）の大内刈を透かして倒し、技有を奪って決勝進出を決めると、決勝では大野将平（天理大）を崩上四方固に抑え込んで初優勝を決めた。

◉優勝＝中矢力選手（東海大）

「五輪の選考会だとわかっていましたし、絶対優勝するつもりでした」

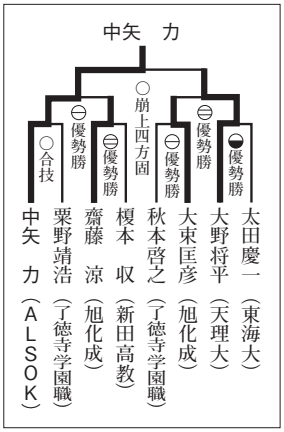
1回戦で右肘を痛め、準決勝では肘をかばっていたところ、右肩を痛めるアクシデント。しかし、得意の寝技に持ち込んで優勝を果たした。

「今後の大会を考えると試合中に怪我をしたとしても勝てる力をつけなくてはいけません。五輪では一番いい色のメダルを取りたいです」

◉秋本啓之選手（了徳寺学園職）

「今は何も考えられませんが、残念です。普段通りの調子でいつもの柔道ができていたので、自分の全体的な力不足です」

準決勝＝中矢（上）が齋藤の大内刈を透かす



◆66kg級

海老沼が好敵手を抑えて優勝

【代表候補選手】
④海老沼匡（パーク24）
⑦森下純平（筑波大）
⑭福岡政章（ALSOK）
⑯髙上智史（日本体育大）

候補選手全員が初戦を突破すると準決勝は海老沼対髙上、森下対福岡となった。海老沼は髙上への指導で有効を得ると、終了間際に大外刈で有効を重ねて決勝進出を決めた。森下は中盤に払腰が福岡を捕らえ、一本勝で決勝の舞台に駒を進めた。

決勝は海老沼対森下。森下は海老沼の一本背負投を掬投に返すがポイントにいたらない。海老沼は森下の大内刈をいなすと森下を引き込み、森下が踏み出そうとした右足に渾身の支釣込足。森下の体が綺麗に一回転して背中から畳に落ちた。

◉優勝＝海老沼匡選手（パーク24）

「五輪に出場するかどうかで人生が変わるので、とても固くなってしまい、内容がだめでした。決勝は狙っていたわけではありませんが、掛けたからには一本にしたくて必死でした。出身の明治大は大変な時期で、OB会長からも『名誉挽回してくれ』と言われてるので頑張ります」

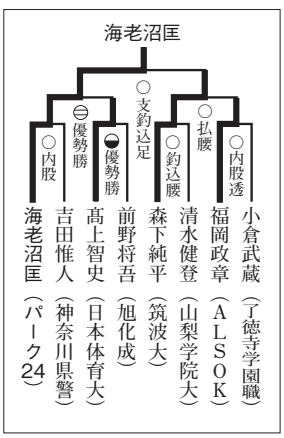
◉準優勝＝森下純平選手（筑波大）

「相手の方が上でした。詰めが甘かったです。自分自身が甘かったのが反省点です」

◉福岡政章選手（ALSOK）

「階級を上げて五輪に出たかったですが残念な結果です」

決勝＝海老沼（奥）の支釣込足が決まる



◆60kg級

平岡が五輪連続出場へ

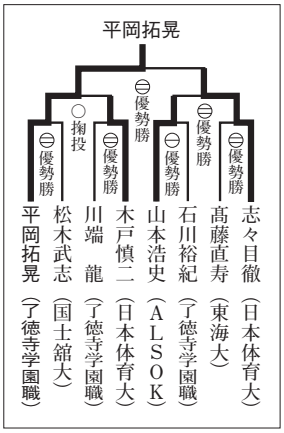
【代表候補選手】
②山本浩史（ＡＬＳＯＫ）
③平岡拓晃（了徳寺学園職）

山本は石川裕紀（了徳寺学園職）との初戦、終盤に内股で技有を奪って準決勝へ。準決勝では大学の後輩、志々目徹（日本体育大）と対戦したが、中盤に背負投で奪われた有効のポイントを取り返せず、優勢負を喫した。

平岡は初戦、指導2で勝ち上がると、準決勝の木戸慎二（日本体育大）を開始14秒、相手の背負投を掬投で返して一本勝。志々目との決勝は、攻めあぐねたが技数に勝り、相手に指導が溜まる。結局、指導2で大一番を制し、本大会5連覇を飾るとともに2大会連続となる五輪出場をその手に掴んだ。

決勝＝平岡（右）対志々目

◉優勝＝平岡拓晃選手（了徳寺学園職）
「世界選手権、GS（グランドスラム）東京、マスターズも負けて、なんとかその負けを取り返したかったです。マスターズが終わってから思い切って練習に打ち込めました。4年前は野村先輩から切符を奪い取るために挑戦者の気持ちで試合をしました。しかし、北京五輪で初戦敗退し、その借りを返すのは同じ舞台でしかできません。もう一度あの舞台に立つために今日は優勝を目指して死ぬ気でやりました。支えてくれた周りの方に感謝しています」



◆78kg超級

杉本が皇后盃の雪辱

【代表候補選手】
①田知本愛（ＡＬＳＯＫ）
④杉本美香（コマツ）

杉本は初戦を突破すると、準決勝では井坂希望（山梨学院大）と対戦した。杉本はここで苦戦。井坂を攻めあぐね、なかなかポイントを奪えない。終盤、なんとか技を重ねて、相手に指導がつき辛勝した。

田知本は準決勝で先の皇后盃で敗れた山部佳苗（山梨学院大）と対戦。延長戦、両者ポイントを得られず、勝敗の行方は判定へ。結果、3―0で山部が勝利を収めた。

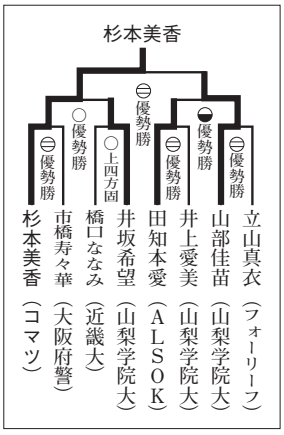
決勝は皇后盃決勝と同じ顔合わせとなった。延長戦に入って、杉本は体落から一本背負投に連絡すると、山部は肩から畳に落ちて有効。杉本が皇后盃の雪辱を果たした。

◉優勝＝杉本美香選手（コマツ）
「自分を信じて、目の前の相手を倒すことに集中しました。皇后盃では練習してきたことを出すこともできずに負けてしまいましたが、今回は出せました。初めてのことでしたが、皇后盃では勝ちたい気持ちが空回りしてしまいました。五輪でも十分ありえることだと思います。皇后盃の経験を活かしたいと思います」

優勝＝杉本美香選手

◉田知本愛選手（ＡＬＳＯＫ）
「自分の持てる力をすべて出し切って負けました。悔しいです。前回の反省があるので、今回は組手を徹底的に練習して臨みました」

敗者の目には涙が光っていた。



◆78kg級

緒方が順当に優勝

【代表候補選手】
②緒方亜香里（筑波大）
⑰岡村智美（コマツ）

緒方は初戦を突破すると、準決勝では延長で穴井さやか（ミキハウス）の体落を内股に返して一本勝。

一方のブロックでは岡村が濵田尚里（山梨学院大）に敗れる波乱。決勝には濵田を破った池田ひとみ（自衛隊体育学校）が進出。

決勝は緒方対池田。終盤、池田の左膝車に奥襟を持った左腕で池田の首を巻き込むようにして倒して技有を奪い、緒方が初優勝を手にした。

◉優勝＝緒方亜香里選手（筑波大）

「優勝してほっとしました」

本人は福岡が苦手だったという。

「金鷲旗もこの大会も勝ったことがなくて、勝ててよかったです」

山場は準決勝の穴井戦。延長残り6秒で内股が決まった。

「一瞬、穴井さんが力を抜いたんです。そこを投げたら投げられました」

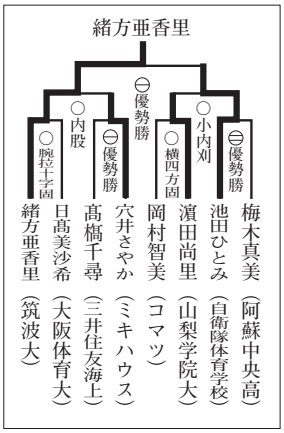
過去2回出場した世界選手権には負けて選出された。

「それがすごく嫌でした。だから絶対に勝つつもりでした。私が一番そう思っていたと思います」

目指すは世界の頂点しかない。

「この後にある合宿はきついと思いますが、乗り越えたら金メダルが見えると思うので頑張ります」

決勝＝緒方（左）対池田



◆70kg級

田知本、嬉しい五輪初出場

【代表候補選手】
③田知本遥（東海大）
④國原頼子（自衛隊体育学校）

世界選手権2大会連続3位入賞の國原は勝ち上がると、準決勝でヌンイラ華蓮（環太平洋大）と対戦。國原は中盤に内股を返され、技有を奪われると、終盤にも小外掛に対応できずに有効を献上して敗退した。

2月のGSパリでこの階級の第一人者、リュシー・デコス（フランス）を破って優勝したことで注目を集める田知本は、準決勝で大学の先輩、今井優子（了徳寺学園職）と対戦した。苦戦するも延長で田知本の大内刈がかかって（技有）、決勝に進んだ。

決勝＝田知本（左）対ヌンイラ

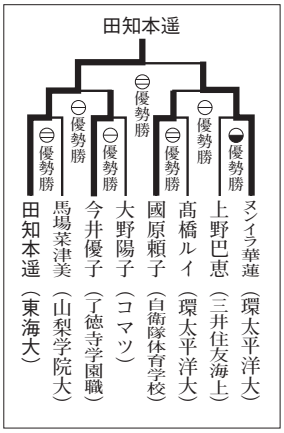
決勝は田知本対ヌンイラ。田知本の積極的な組手にヌンイラは技を仕掛けられず、指導2で田知本が優勝を果たした。

◉優勝＝田知本遥選手（東海大）

「初優勝なので嬉しいです。今回のような心境で大会に臨むのは初めてでした。今まで優勝は高い目標でしたが、今は優勝して、その先を目指せるまでになりました」

田知本は78kg超級の愛（めぐみ）と姉妹である。その姉と大会前に喧嘩するといい成績を収めるジンクスがある。

「今回も喧嘩しました。でも放送で姉が負けたのがわかって、家族のためにも、姉の分まで頑張って、私は絶対に優勝するという気持ちになりました。五輪は出場することが目的じゃないので、メダルを取ります」



◆63kg級

最右翼の上野が優勝

【代表候補選手】
①上野順恵（三井住友海上）
⑤田中美衣（了徳寺学園職）
⑰阿部香菜（三井住友海上）

決勝＝上野（上）が田中を攻める

注目の上野は初戦を優勢勝し、準決勝では安松春香（環太平洋大）と対戦。中盤に一瞬の隙をとらえて腕拉十字固で一本勝して、順当に決勝へ駒を進めた。

対抗の田中は初戦で松本千奈津（宮崎商業高）と大接戦を演じ、僅差で勝ち上がると、準決勝は初戦で阿部を破った太田晴奈（淑徳大）から指導2を奪って辛勝した。

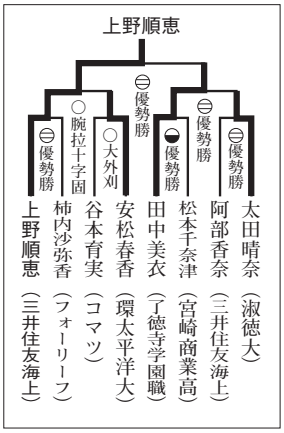
決勝は両者攻めあぐねる展開。技数の劣る田中に指導が重なり、上野が2年ぶり7度目の優勝を決めた。

◉優勝＝上野順恵選手（三井住友海上）

「ほっとしています。この大会は絶対優勝しようと思っていましたが、変にあがったり、固くなることもありませんでした」

北京五輪の選考では、この大会を優勝したが、代表には谷本歩実（コマツ＝当時）が選出された。

「あの時があるから今の自分があると思っています。当時、一本を取る柔道と比較されたので、私の地味な柔道でも五輪にいけることを証明したい気持ちがありました。五輪では地味に地道にしぶとくやりたいと思っています」



◆57kg級

宇高が佐藤、松本を連破

【代表候補選手】
①松本　薫（フォーリーフ）
②佐藤愛子（了徳寺学園職）

初戦、宇高菜絵（コマツ）と対戦した佐藤だったが、試合は終始宇高のペースで進んだ。開始3分、宇高の大外刈に佐藤が堪えきれず、佐藤は初戦で姿を消した。宇高は準決勝で平井希（自衛隊体育学校）を破ると、決勝では松本とまみえた。

延長戦、終了間際の松本の大外刈を宇高が返し、これが有効。宇高がこの階級を制した。

◉優勝＝宇高菜絵選手（コマツ）

「厳しい日々が続いていたので嬉しいです。世界選手権ではいいところを見せられなかったので、今回、結果を出せてよかったです」

決勝＝宇高（奥）の大外返

◉準優勝＝松本薫選手（フォーリーフ）

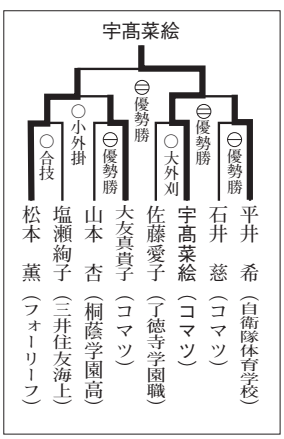
「気持ちで戦ってきました。何かがうまくいかなかったわけではありませんが、まだまだということです」

◉佐藤愛子選手（了徳寺学園職）

「すっきりしました。ここまで続けてきてよかったです。現役中は幸せな時間だと思います。今後のことは色々考えています」

試合後に畳を触る佐藤

大会前から日本人と試合するのは最後だと思っていたという。試合場を降りるとき、しゃがみ込んで畳を触る姿がすべてを物語っていた。



【大会結果】

◆男子	優勝		2位	3位	
100kg超級	七戸　龍（九州電力）	（初優勝）	上川大樹（京葉ガス）	王子谷剛志（東海大）	石井竜太（日本中央競馬会）
100kg級	穴井隆将（天理大職）	（４年連続５回目）	浅沼拓海（東海大）	熊代佑輔（ALSOK）	七戸　虎（福岡大）
90kg級	加藤博剛（千葉県警察）	（初優勝）	西山将士（新日本製鐵）	西山大希（筑波大）	吉田優也（旭化成）
81kg級	中井貴裕（流通経済大）	（２年ぶり２回目）	川上智弘（國學院大）	海老泰博（旭化成）	長島啓太（日本中央競馬会）
73kg級	中矢　力（ALSOK）	（初優勝）	大野将平（天理大）	齋藤　涼（旭化成）	大東匡彦（旭化成）
66kg級	海老沼匡（パーク24）	（３年連続３回目）	森下純平（筑波大）	髙上智史（日本体育大）	福岡政章（ALSOK）
60kg級	平岡拓晃（了徳寺学園職）	（５年連続５回目）	志々目徹（日本体育大）	木戸慎二（日本体育大）	山本浩史（ALSOK）
◆女子					
78kg超級	杉本美香（コマツ）	（４年連続４回目）	山部佳苗（山梨学院大）	井坂希望（山梨学院大）	田知本愛（ALSOK）
78kg級	緒方亜香里（筑波大）	（初優勝）	池田ひとみ（自衛隊体育学校）	穴井さやか（ミキハウス）	濱田尚里（山梨学院大）
70kg級	田知本遥（東海大）	（初優勝）	ヌンイラ華蓮（環太平洋大）	今井優子（了徳寺学園職）	國原頼子（自衛隊体育学校）
63kg級	上野順恵（三井住友海上）	（２年ぶり７回目）	田中美衣（了徳寺学園職）	安松春香（環太平洋大）	太田晴奈（淑徳大）
57kg級	宇髙菜絵（コマツ）	（２年ぶり２回目）	松本　薫（フォーリーフ）	平井　希（自衛隊体育学校）	大友真貴子（コマツ）
52kg級	中村美里（三井住友海上）	（３年連続４回目）	西田優香（了徳寺学園職）	橋本優貴（コマツ）	宮川拓美（コマツ）
48kg級	福見友子（了徳寺学園職）	（２年ぶり４回目）	岡本理帆（藤枝順心高）	山岸絵美（三井住友海上）	遠藤宏美（筑波大）

◆日本代表発表会見

大会終了後、会場に隣接する福岡サンパレスでロンドン五輪に出場する各階級の代表発表および各代表の記者会見が行われた。

初めに吉村和郎強化委員長から代表選手の発表がなされ、その後、男女両監督が意気込みを述べた。

◉吉村和郎強化委員長

「金メダルの目標は半分の7個。女子48kg級については、浅見は最近寝られなかったというが、自分に負けたかなと思う。福見は崖っぷちで持ちこたえた。決勝の内容に不満は残るが結果としては優勝した。男子90kg級の選考はもめると思ったが、西山将士は今日の試合で力を出し切り、イリアディスに勝った実績がある。他の二人は負けている」

◉篠原信一全日本男子監督

「重量級は不甲斐ない。メンタルを含めて徹底的に追い込んで鍛えていく。とことん追い込んで自分に自信が持てるくらい追い込んでいく」

◉園田隆二全日本女子監督

「女子も一つでも多くの金メダルが取れるように、選手はもちろん、我々も死ぬ気で頑張る。具体的にはそれぞれ軸になる技や攻め方があるから、そこを広げていく。いろんな引き出しを一つ二つ増やしたい。48kg級の選考に関しては、どちらを出しても金を取ってくるでしょうから逆に厳しかった。浅見の1回戦負けは大きかった」

【ロンドン五輪日本代表選手】

◆男子

▽60kg級＝平岡拓晃（了徳寺学園職）
▽66kg級＝海老沼匡（パーク24）
▽73kg級＝中矢　力（ＡＬＳＯＫ）
▽81kg級＝中井貴裕（流通経済大）
▽90kg級＝西山将士（新日本製鐵）
▽100kg級＝穴井隆将（天理大職）
▽100kg超級＝上川大樹（京葉ガス）

◆女子

▽48kg級＝福見友子（了徳寺学園職）
▽52kg級＝中村美里（三井住友海上）
▽57kg級＝松本　薫（フォーリーフ）
▽63kg級＝上野順恵（三井住友海上）
▽70kg級＝田知本遥（東海大）
▽78kg級＝緒方亜香里（筑波大）
▽78kg超級＝杉本美香（コマツ）

【ロンドン五輪出場への道】

ロンドン五輪より、出場権は国ではなく、世界ランキングに応じて個人に与えられるようになった。よって、ランキング上位に入っていないといくら国内の大会で良績を残しても、出場権を持っていなければ出場できない。

全日本選手権覇者の加藤博剛や全日本女子選手権覇者の山部佳苗はランキングが低いため、出場権を持っていないのである。

下に詳しく解説する。

⑴　ロンドン五輪柔道競技出場枠（386 枠）

男女合わせて 386 枠。内訳は下記のとおり。

①開催国（イギリス）に 14 枠（男女 7 階級）

②招待国に 20 枠

③残りの 352 枠は IJF ランキングによって決める。

⑵　⑴③の割り振りについて

① IJF ランキングによる出場枠（252 枠）

ⓐ男子

各階級上位 22 名（22 カ国、22 名）を選出。

ⓑ女子

各階級上位 14 名（14 カ国、14 名）を選出。

※各階級とも上位 22 カ国目（女子は上位 14 カ国目）の選手まで出場権が与えられる。

※ 1 つの国から 1 名の選手のみが順位に入っている場合、国ではなくその選手が資格獲得。

※ 1 つの国から複数の選手が順位に入っている場合、順位に入っている選手の中から、各国柔道連盟が選出する。

※ランキングは 2010 年 5 月 1 日～ 2012 年 4 月 30 日の 2 年間に獲得したポイントが有効で、各人が獲得したポイント上位 5 大会をカウント。2 年間で 10 大会を加算する。なお、2010 年 5 月 1 日～ 2011 年 4 月 30 日のポイントは 50％を加算、2011 年 5 月 1 日～ 2012 年 4 月 30 日のポイントは 100％を加算する。

②大陸の出場枠（100 枠）

①の資格枠に加えて、それに続くランキング上位選手が対象となる。

Road to London

【代表選手コメント】

◉48kg級＝福見友子選手

「五輪はもうすぐなので、自分を見つめ直して死ぬ気で頑張ります。金しか考えていません。遠回りしましたが、諦めず粘り強くやってきたことが実ってよかったと思います。初めてですし、思うがままに自分らしさを出して思い切り戦いたいです」

◉52kg級＝中村美里選手

「自分の弱点を潰して不安なく乗り込みます。北京の悔しさを晴らすためにも金を取りたいと思います」

◉57kg級＝松本薫選手

「名前が呼ばれたときは『よっしゃあ』と思いました。今回負けたことを反省していきます。目指すのは金メダルです」

◉63kg級＝上野順恵選手

「素直に嬉しいです。金を目指して、怪我のないように死ぬ気で練習したいと思います」

◉70kg級＝田知本遥選手

「信じられない気持ちです。自分の苦手なパターンを洗い直し、柔道の質を上げて臨みたいと思います」

◉78kg級＝緒方亜香里選手

「自分が五輪選手なんだと実感しています。課題が多いので一日一日を大事にして取り組んでいきます」

◉78kg超級＝杉本美香選手

「嬉しさとともにほっとしてます。心技体を整えて、試合に臨みます」

◉60kg級＝平岡拓晃選手

「正直、嬉しいです。前回取れなかった金メダルを取ります」

◉66kg級＝海老沼匡選手

「嬉しいです。良い点を伸ばし、悪い点を潰して全力で頑張ります」

◉73kg級＝中矢力選手

「課題を克服して本番に臨みたいと思います」

◉81kg級＝中井貴裕選手

「嬉しいです。一戦一戦全力でやっていきます」

◉90kg級＝西山将士選手

「選ばれてびっくりしています。ハートを二回り強くしたいです」

◉100kg級＝穴井隆将選手

「ほっとした気持ちと気が引き締まる思いです。とにかく稽古を積んで、自分を信じて畳に上がります」

◉100kg超級＝上川大樹選手

「嬉しいです。これから70日間、できることを精一杯やり、いい成績を残したいと思います」

130年、講道館柔道を未来に繋ぐ

本年は、明治15年（1882）に、嘉納治五郎師範が東京・上野の下谷にある永昌寺に講道館を創立してから130周年の節目に当たる。これを記念して、4月28日、講道館創立百三十周年記念式典が東京・文京区の講道館大道場で午前9時から厳かに挙行された。また、午後6時からは同区の東京ドームホテルにて、記念祝賀会が華やかに催された。

定刻となり、厳粛な雰囲気の中、講道館7階の大道場に太鼓の音が鳴り響き、式典が始まった。

はじめに、上村春樹講道館長が壇上に立ち、「講道館は、明治15年、嘉納治五郎師範によって、上野・下谷の永昌寺のわずか12畳の書院において開始されました。それから130年経った現在、嘉納師範の考え、その理念を受け継いでこられた多くの先達のお蔭で、今年、講道館の入門者数が220万人に達しました。また、今では200の国と地域が国際柔道連盟に加盟するに至りました。この柔道の普及は、競技としての面白さはもちろんありますが、嘉納師範の唱えられた『柔道を通しての人づくり』、『己を完成し世を補益すること』の理念が受け入れられたことに尽きると思っています。私たちは、今後も講道館柔道を後世に正しく伝えていく責務があり、そのためには、『精力善用・自他共栄』を実践した『人づくりとしての柔道』、『教育としての柔道』を柔道界一丸となって進めていかなければなりません。今回の130周年記念を契機に、心を新たにして柔道界の更なる発展に寄与していきたいと思います」と式辞を述べた。

上村春樹講道館長

続いて、講道館の館員を代表して、長谷川博之九段が、中学校武道必修化で多くの学校が柔道を選択したことに、館員として大きな使命が課せられたものと身の引き締まる思いで受け止めており、また、今年のロンドンオリンピックの代表選手たちには、美しい技と品格のある態度をもって、柔道の素晴らしさを世界中に示していただきたいと述

長谷川博之九段

講道館 創立130周年記念祝賀会

嘉納治五郎師範の志（こころざし）を受け継いで

べ、最後に、東日本大震災の支援活動で生まれた〝柔道の絆〟は、新たな方向性を示すものであるとして、祝辞とした。

藤田弘明九段

次に、全日本柔道連盟を代表して、藤田弘明九段が、全柔連は発足以来60有余年、講道館と表裏一体にして世界の柔道をリードしてきたが、今後も共に、嘉納師範の理念を継承しつつ、適切な指導・助言、情報提供等、柔道界を先導していく大きな役割を担っていかなければならないと決意を述べ、祝辞とした。

この後、永年勤続者表彰を行い、記念式典は終了した。

夕方6時からは、東京ドームホテルにおいて来賓及び関係者約500名が集い、祝賀会が開催された。

はじめに上村館長が挨拶を行い、続いて来賓代表が祝辞を述べた。

久保公人氏

文部科学省・久保公人（きみと）スポーツ・青少年局長は、嘉納師範の功績を讃え、また、文科省として、今後も中学校武道必修化の条件整備に万全を期し、昨年成立のスポーツ基本法に言及し、青少年の体力向上、人格形成に寄与する施策等を積極的に展開していくと述べた。

竹田恆和氏

日本オリンピック委員会の竹田恆和（つねかず）会長は、100年前、オリンピックのストックホルム大会に、嘉納師範が団長となって初めて日本が参加し、今年のロンドン大会に上村館長が団長となって参加することに感慨深いものがあると述べた。

阿南惟正氏

阿南惟正（あなみこれまさ）講道館理事は、先日、久しぶりに永昌寺を訪れ、あらためて130年の歳月の重みを感じ、世界の柔道の総本山として、講道館の更なる発展を祈念して祝辞とした。

引き続き、鏡開き、乾杯、祝宴となり、祝賀会は盛会裡に終了した。

心技体 人を育てる総合誌
月刊 武道

全国都道府県立武道館協議会設立三十周年記念式典

設立から30年、地域社会への更なる武道の振興・普及を目指す

全国都道府県立武道館協議会は昭和56年（１９８１）の設立から昨年で設立30周年を迎えた。その記念として、４月28日、東京・千代田区のホルグランドパレスにて、本年度理事会終了後に記念式典が行われた。

▶挨拶に立つ松永光日本武道館・全国都道府県立武道館協議会会長

はじめに、松永光日本武道館・全国都道府県立武道館協議会会長が挨拶に立ち、「武道は、日本人を日本人らしくし、日本の伝統文化の中で最も自慢して良いものの一つではなかろうかと思います。その武道の普及・振興のために皆様方はそれぞれの地域で今日まで長年にわたり、ご尽力いただいており、そのご努力に深く感謝申し上げる次第です。今後も武道振興を通じて、より良い日本をつくるために皆様方と共に微力ながら頑張っていきたいと思いますので、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます」と述べた。

次に、本協議会の常任理事でもある高村正彦武道議員連盟会長の祝電が披露され、乾杯へと移った。乾杯は、臼井日出男日本武道館・本協議会理事長が音頭を取り、「おめでとうございます」の唱和で乾杯、懇談へ入った。

しばらくして役員挨拶へと移り、臼井理事長は、「いよいよ武道元年という年でございます。中学校武道必修化は大変喜ばしい反面、難しさもございます。例えば小学生からずっと剣道をしていた者が、中学校で柔道を習うとなると抵抗があるかと存じます。今後は自分が望む武道を選択出来るような環境づくりも必要であろうと思います。今後とも皆様方のご協力をお願い申し上げます」と挨拶した。

続いて、奥田幹生日本武道館・本協議会常任理事が、「健康で皆様と30周年を迎えることが出来、大変ありがたく感謝しております。今は学校、職場、政治、経済それに教育も本当に心配でございます。知育・体育・徳育のバランスの取れた教育は必要ですが、逞（たくま）しい教育をしなければ、日本の将来はどうなるかと、大変気になります。戦前、私は京都の武徳殿で剣道をして大変しごかれましたが、非常に懐かしい思い出として残っております。一番大事なのは、もっと皆に武士道精神を身に付

けていただくことだとつくづく思います。皆様方には今後もこの武士道精神を多くの方々に身に付けていただくよう、先頭に立って指導していただくことを心の底からお願いさせていただきます」と挨拶した。

臼井日出男 理事長

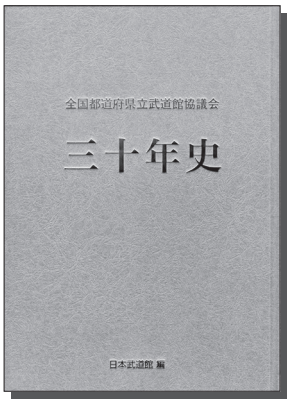
奥田幹生 常任理事

引き続き、三藤芳生日本武道館理事・事務局長、本協議会常任理事が設立の経緯から30年の歴史を振り返って挨拶を述べた。また、当日発行の記念誌（左記参照）について紹介した。

式典の様子

『全国都道府県立武道館協議会三十年史』を発行

全国都道府県立武道館協議会では、設立30周年を記念して『全国都道府県立武道館協議会三十年史』（B5判290頁、発行人＝臼井日出男、編集人＝三藤芳生、2千部）を式典当日発行した。本協議会並びに加盟武道館の歴史・組織・事業及び将来展望などにも触れ、写真と資料で分かりやすく綴った内容となっている。本書は関係各所へ順次配布される。



最後に、臼井理事長が中締めを行い、式典は盛会の裡に終了した。

好評発売中

小笠原 清忠（弓馬術礼法小笠原教場 三十一世宗家）著

武道の礼法

相手に誠心が響く礼法を小笠原流礼法宗家が直々に指南する、武道関係者必読の一書。

四六判・上製・278頁

◎ ご注文・お問い合わせ ◎

日本武道館 月刊「武道」編集部
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3
TEL 03-3216-5147 FAX 03-3216-5158
http://www.nipponbudokan.or.jp

心技体 人を育てる総合誌
月刊 武道

好評発売中

武道・スポーツの真髄

ほんとうの価値の伝え方

スポーツドクター **辻 秀一** 著

四六判・上製・248 ページ

武道やスポーツは「医療である、芸術である、コミュニケーションである、教育である」とする筆者が、指導者のために書いた良きハンドブック。ぜひ、ご一読を。

主な目次

第１章　「文武両道」の人間教育
第２章　真剣勝負を楽しみ、人間的成長を図る
第３章　「セルフイメージ」という心のエネルギー
第４章　トップアスリートに学ぶ「社会力」
第５章　たかが目標、されど目標
第６章　「武士道書」に学ぶ
第７章　子どもたちの「社会力」を育てる
第８章　「オンリーワン」の子どもを育てる

編集・発行　日本武道館
〒102-8321　東京都千代田区北の丸公園2-3
ホームページhttp://www.nipponbudokan.or.jp

お問い合わせ・ご注文は
日本武道館出版広報課
までどうぞ！

TEL03(3216)5147
FAX03(3216)5158

日本武道館発行の単行本（本をクリックすると、詳細が表示されます）

日本の武道

日本武道館 編

（B5判・上製・箱入・526頁）

BUDŌ：THE MARTIAL WAYS OF JAPAN

日本武道館 編
（翻訳・編集：アレキサンダー・ベネット）
（B5判・上製・DVD付・336頁）

武士道に学ぶ

東京大学大学院教授
菅野 覚明 著
（四六判・上製・344頁）

武道の礼法

弓馬術礼法小笠原教場三十一世宗家
小笠原清忠 著
（四六判・上製・278頁）

マンガ・武道のすすめ

漫画家・別府大学教授
田代しんたろう 著
（B5判・並製・236頁）

武道における身体と心

神戸学院大学教授
前林 清和 著
（四六判・上製・370頁）

＜増補版＞

私も武道経験者です

月刊「武道」記者
吉野 喜信 著
（四六判・上製・326頁）

今、なぜ武道か

―文化と伝統を問う―

福島大学教授
中村 民雄 著
（四六判・上製・370頁）

大先輩に聞く

月刊「武道」記者
田谷 将俊 著
（四六判・上製・376頁）

武道 過去・現在・未来

国際武道大学教授
田中　守 著
（四六判・上製・274頁）

武道 子どもの心をはぐくむ

早稲田大学教授・教育カウンセラー
菅野　純 著
（四六判・上製・410頁）

武の素描

埼玉大学教授
大保木輝雄 著
（四六判・上製・220頁）